

協同組合教育の拡充に向けて

— IYC2025大学寄付講座等拡大に向けたシンポジウム —

特別理事研究員 柳田 茂

2025年は国連が定めた2回目の国際協同組合年(IYC2025)である。国連は24年10月の総会でそのテーマを「協同組合はよりよい世界を築きます」に決定し、持続可能な開発目標(SDGs)実現に向け、各国における協同組合活動の一層の充実に強い期待を示した。

国連の呼びかけにに応じて、わが国では日本協同組合連携機構(JCA)を中心にIYC2025全国実行委員会が発足し、協同組合への理解促進と協同組合の事業・活動の充実を通じたSDGsへの貢献を目指して、様々な取組みが開始されている。

その一環として24年10月25日に那覇市で開催された協同組合教育の拡充に向けたシンポジウムに参加した概要をレポートする。

1 IYC2025大学寄付講座等拡大に向けたシンポジウム

協同組合とその連携組織による大学寄付講座等の取組みは、次代を担う若者たちの協同組合の認知度を高め理解を促進していくうえで極めて重要な活動である。JCAの把握では現在全国18大学で開講され25年度も4大学で新規開講の準備が進められている。

今後の拡大・充実に向け、IYC2025全国実行委員会が日本協同組合学会と共にシンポジウムを開催し、4つの大学で取り組まれている寄付講座の実例の報告を受け、今後の深化と活性化の方向性を考察した。日本協同組合学会の秋大会が開かれた那覇市で実開催され、オンラインも併用して学者・研究者や協同組合関係者など約130人が参加した。

2 北海道大学の実取り組み (北海道のフィールドで協同組合を学ぶ)

北海道大学の寄付講座は、道内16の協同組

織で組成された協同組合ネット北海道が、1年生を対象に「フレッシュマンセミナー」を開講し、「北海道のフィールドで協同組合を学ぶ」をテーマとする実践型の教育を行っている。

講座は、協同組合の職員の話を聞く、現地に行くの2つを重要点として構成されている。24年も約30人の学生が、協同組合の理念やなりたちおよび事業活動の概要を学んだうえで、道内のJA、森林組合、漁協、生協等の事業現場を訪れて、北海道の農山漁村が直面している様々な課題の実情と、その解決に取り組んでいる協同組合の事業・活動を実地で学んだ。

北海道大学も近年は都会育ちの学生が増えているようで、実地研修後の振り返りでは、農林水産業の現場や農山漁村に初めて行った新鮮な感動とともに、地域社会を支えている協同組合の事業や活動を初めて知って、驚きや共感を示す声が聞かれている。

3 鹿児島大学の実取り組み (協同組合を知ろう)

鹿児島大学の寄付講座は、20年に鹿児島県のJAグループが開講し、現在は県内の連携組織である鹿児島県協同組合協議会によって農学部の3年後期に「協同組合を知ろう」の講座名で開講している。

多様な協同組合の理念や歴史、事業の仕組みを学ぶことにより、独自の組織形態を有し地域産業の維持・発展や地域住民の暮らしに貢献している協同組合への理解を深めることを目的としている。

講座は、座学と現場の事業や活動を見学体験するエクスカージョン、これらを踏まえた総合討論の組合せで構成されている。

総合討論では、学生たちが学び見学体験し

たなかから協同組合が抱える課題を自ら設定して、その解決に向けた提案を行い議論している。学生たちの提案のなかには実際に採用・実施されたものもあり、講座を修了した学生たちからは、「協同組合への関心が高まった」、「就職について考えるきっかけになった」等の声が寄せられている。

4 琉球大学の取組み (協同組合論)

琉球大学の寄付講座は、17年度にワーカーズコープによって開講後、23年度から沖縄県の協同組合連携組織であるJCCおきなわによる「協同組合論」となり、100人を超える受講者を集めている。

ガイダンスと県内の様々な協同組合の役職員による講義を行ったうえで、最終日に学生たちによるロールプレイング・ゲームを実施している。

ガイダンスは協同組合の理念を経済社会の全体観のなかで学ぶことに重点が置かれている。また各団体の講義も各々の事業活動の紹介にとどまらず、「世界と日本の生協運動」や「日本と沖縄の農業」など、学生たちが広い視野から協同組合を学べるよう心掛けられている。

ロールプレイング・ゲームは、「少子高齢化のなかで、持続的な地域社会を支えていくために協同組合として何ができるか」との問題意識を基に、学生たちがJAや生協などの組合員や職員の立場で事業や活動を考え、提案や要望を出し合い、討議する実践的な内容で行われている。

5 沖縄国際大学の取組み (ワーカーズコープ論)

沖縄国際大学の寄付講座は、ワーカーズコープによる「ワーカーズコープ論」として、16年度から23年度まで開講した。

講座の目的を「よい仕事を考える」と「社

会課題と働くことを考える」と定め、よい仕事とは何か、貧困や待機児童や買い物弱者などの社会課題の解決に自分が何をできるかを学生たちに考えてもらうことに主眼を置いていた。

講座は座学とグループワークで構成し、講師は協同総合研究所およびゲストスピーカーも務め、就職を控えた学生たちに「働くことと地域」という視点を学ぶ機会の提供に努めた。修了した学生たちからは「働くことの考え方の幅を広げることができた」、「地域や社会のために役立つ仕事があることを知った」などの感想が寄せられた。

6 シンポジウムに参加して(感想)

今回報告された4大学の寄付講座は、いずれも学生たちに協同組合の理念や事業・活動内容を理論と実践の両面からわかりやすく伝えるところに、自ら考える場を提供する優れた内容であった。

その秘訣は、寄付元である協同組合とその連携組織が大学としっかりコワークして、各団体の役職員が講師やフィールドワークの受入コーディネーターとして、手間を惜しまず真摯に学生たちに向かい合っているところにあると考えられる。関係各位の熱意と尽力に敬意を表したい。

シンポジウムの最後に、IYC2025全国実行委員会幹事長のJCA比嘉政浩専務から、協同組合とその連携組織による大学寄付講座等の取組みの重要性の確認と、今後のさらなる拡大に努めていきたいとの総括が行われた。

持続可能な社会の実現に向け世界的に協同組合への期待が高まるなか、IYC2025を契機として、日本においても大学等での協同組合に関する教育の機会が拡大・充実していくことを期待したい。

(やなぎだ しげる)